

Eureka V

六年制通信 No.24 平成 29 年 11 月 17 日 (金) 号

尺度の問題

高麗尺という言葉をはじめて目にしたのは司馬遼太郎の作品だったと思います。これで「こまじゃく」と読むということもその時知りました。飛鳥の古墳が発見されたとき、専門家の間では高麗尺が用いられているとの見解があった、とか。高麗は高句麗のことです。尺は、土地の測量や裁縫などに用いられます。皆さんは尺貫法についていつごろ勉強するのでしょうか。あるいはもう必要のない知識として切り捨てられているのかもしれませんが。ちなみにメートル法はナポレオンの時代に統一単位系として用いられるようになり、日本も採用しています。今、メートル法を使わないのはアメリカくらいじゃないかなあ。

昔、この尺には様々な種類があって用途によって使い分けていたようです。墳墓など土木用には高麗尺、その他には唐尺、あるいは中国の周尺や晋前尺が使われていた

時代もあったそうです。江戸時代には大工の使う曲尺かねにも享保尺、又四郎尺、念仏尺、新尺（伊能忠敬の作ったもの）があって、それぞれ寸法が違っていました。他にクジラ尺などもあって、要するに「一尺」と言っても、受け取る側によって微妙に違うのですね。以上、司馬さんに教えてもらった知識です。

教えてもらった作品は『翔ぶが如し』ですが、尺の違いを比喻として、司馬さんは「人間の相克は利害にもよるが、尺寸にもよる。人間の不幸は人によって尺度の大小が異なっていることである」と言っています。

私は一時、西郷と大久保の世間の評価について、また西郷の征韓論について疑問を持ったことがあります。西郷も大久保も同じ薩摩の出身で二人とも 50 歳を前にして倒れています。西郷は西南戦争で、大久保は暗殺ですね。幕末から明治にかけて、どう見ても大久保の方が優れた政治家だったと思うのですが、日本人は西郷が大好きですね。鹿児島では西郷さんの悪口など決して（今でも）言えないのだそうです。西郷さんの銅像は市内のあちこちにありますが、大久保は西郷の敵として認識されていたようで、銅像が建てられたのは何と昭和 50 年代のことです。このあたり、私にはちょっと理解できないですね。徳川幕府を倒すまでの西郷さんは、これはもう軍事の天才です。鳥羽伏見の戦いから一気に江戸に攻め入るというのは、ふつう思いつくわけがないでしょう。恐らく西郷を除いて、誰ひとり考えつかなかったと思います。そして江戸城の無血開城を経て、西郷さんはもともと備わった仁徳もあり、神のごとく崇められることになったのです。前にも書きましたが、廃藩置県も西郷なしにありえなかつ

たと思います。しかし、その後、明治政府を確立したのは大久保です。幕府を倒した後の西郷さんは、全く目標を失ってしまったかのようです。英雄が一転、むしろ困った存在になるわけです。面白いですね。もし西郷がいなかったら、幕府はあんなに早く倒れなかったでしょう。しかし大久保がいなかったら日本の近代化は、どうなっていたかわかりません。いろんな捉え方があるでしょうが、私には大久保の方が、人気は圧倒的にないけれど、優れた点が多かったように思います。征韓論でも、一度は決まった西郷の出兵をひっくり返したのも大久保です。大久保だけが唯一西郷と対等に口が利けたわけです。小さいころから同郷で、兄弟のように育っていますからね。いや、歴史の講釈はこれくらいにしましょう。

司馬さんは、人によって異なる尺度が人間の不幸を生むと言うのですが、それに続けて「この平凡な事実が人間と人間の関係に誤解を生み、軋轢を生ぜしめ、無数の悲劇や喜劇を歴史の中に生み、時には歴史を変動させてきた」とし、さらに続けて「日常のレベルではなおさらである」と書いています。例えば私が、西郷や大久保をどう評価するかを考えると、それは私の尺度で測っているというわけですね。当たり前といえば全く当たりの事なのですが、人物の評価は「その人の偉さ」という絶対のものがあるわけではなく、「見る側の尺度」だけが存在するのです。ですから、ある人をどう見るかについて、様々な意見、解釈が成り立って、時にそれらは正反対のものであったりするわけですが、そういうのを読んでいると、結局実像がよくわからなかったりするのですね。歴史上の人物というのはそういう場合が多々あります。前にも紹介しましたが、勝海舟の言うように「行蔵は我に存す。毀誉は他人の主張」ですからね。自分という人間は、他人の勝手な尺度で測られているのでしょうか。しつこいですが、ある人物を評価する場合、浮かび上がってくるのは、その人物というよりむしろ評価している側の人物像、評価する側の持っている尺度だということですね。このことはよく自覚すべきことだと思います。

私たちの日常でも、司馬さんの言うように「日常のレベルではなおさらである」わけだから、あの人はこういう人だ、あの人は自分勝手だ、あの人は無類の正直者だ、あの人は親切だ、あの人は〇〇な人だ、だから好きだ、だから嫌いだ、とか盛んに人物評価をしています。そしてコロコロと、その評価は変わっていきます。それでも自分の考えが（つまり尺度が）正しいとみんなが考えています。それは、しかし、自分の尺度と他人の尺度が大きく、あるいは微妙に違うだけなのであって、その人の実像とは違っている場合がほとんどなのではないでしょうか。私たちは、もっと自分の尺度を疑っていい、そう思うのです。他人に当てる私たちの物差しが、短かったり歪んでいたりしたら、その人のことを誤解したまま、あるいはその人のことを無用に傷つけたまま、私たちはそのことに気づかないで、自分が正しいと思い続けることになります。これが、人間同士の軋轢を生む元ですね。

案外私たちは簡単に人を判断しますが、それはひょっとしたらその人の一面だけに、自分勝手な尺度の物差しを当て、わかった気になっているだけかもしれません。ですから、私たちは自分の尺度を正しく持っているか、それを問うべきだと思うのです。